

松本 茂

○アクティブラーニング、探究学習、異学年交流など、学びの質の変化を求めているいっぽうで、時間割の基本的な考え方が従来と変わらず硬直的で、目的を達成しにくくしているように思う。

○補充的な学習、発展的な学習のいずれにしても、いつも同じ学級、学年の生徒とともに学ぶという発想から脱却すべきである。ICT の積極的な活用も考えるべき。

○ICT の活用は「・・・が可能である」という夢のような議論に帰結することが多いが、今回のコロナ禍において、生徒は休校なのに、教員は毎日登校し、三密状態で教員会議を実施、講師には来校してもらい辞令（紙）を交付、といった「滑稽な」状態が続いた学校が少なくないと聞いている。（教育委員会からの指示待ち状態の）管理職の発想、学校とは何かということ、教員の役割など、根本的に変えるべきことが多い。いずれにしても、教員も在宅勤務できる ICT の活用を推進すべきであろう。

○ICT をさらに活用するには、サポートスタッフの充実、教員研修の充実、研修時間確保のための働き方改革の推進などの「環境整備」が絶対に必要。全国すべての先生に熊本の先生たちのようなことが、これからすぐに可能であるという発想は危険。全国展開するには多くのサポート（人材、機器の整備、ネット環境整備などが必要。）

○オンライン上の授業において、生徒どうしの関係性が強まるようにアプリを上手に活用する方法、コミュニケーションを活発にするためのオンライン上の活動などについての研修が必要である。

○ICT は従来のように学校（授業）で活用するものという発想を超え、自宅での学習に活用するという方向性を模索すべきである（そのことで起こりうる問題も検討したうえで…）。現状では、学校外での学びの質と量に大きな「格差」があると思われる（例 塾に行ける子と行けない子、親が勉強を見てあげられる余裕があるかないか、など）。塾などに行かなくてもよくなる環境づくりに ICT を活用したい。

○授業内容を補完するコンテンツを用意、紹介してもらいたい。例えば英語教育。なぜ英語が使えない人が多いかといえば、小学校から高校までに英語に触れる時間が不足していることが最大の原因。子どもたちの興味関心にあったオーセンティックな素材を用意、紹介し、インプット量を増やすことを目指す。

○オンライン授業（を録画したもの）であれば、登校できない子どもたち、教室での活動に入っていない子どもたちにも学びの機会を与えられる可能性がある（石井先生が主張されている「インクルーシブな学校づくり」と根底は同じ発想）。